

## 子ども・学校・地域を統一的にとらえた 教育課程で豊かな学力の保障を

### 二、報告の概要と討論の様子

報告Ⅰ「石ころのささやき、砂のつぶやき」

大口久克

〈報告の概要〉

檜山管内せたな町立大成中学校 青木治真

### 一、はじめに

大学生二名を含む十名の参加者で分科会が始まりました。改訂学習指導要領が中学校ではこの4月から、次年度には高校で本格実施となるなかで、それぞれの固有名詞を持った地域にある学校がその独自性をはっきりとした教育課程をどのように組み立てていくかが大きく求められています。

そして、教育課程を編成する際にどうしても握って放してはならない、子ども論、学力・学習論、学校論をどのような議論を経ながらより豊かに展開していくか。校種の別で議論の展開の違いはありながらも、中・高の現場にいる者が子ども達の示す事実をどのように理解しているかということとを交流する中で、一人の人間の成長・発達の過程をより深くつかむことが

地域の人たちが子ども達にやさしい大成。その大成が大好きな子ども達。伝統芸能を子ども達が伝承し、それを地域住民が目を細めて喜ぶ。しかしそんな大好きな大成に子ども達はどれだけ「誇り」を持っているのか。遊ぶ場所も働く場所もないという過疎地のマイナスイメージも片方を持ちながら生活しているのが実際である。

そんな子ども達も理科の時間に家の周りから拾ってきた石・砂を学習の材料にしたときに、大きな反応を示した。当たり前のように存在している足下の土地に壮大な歴史があり、普段気にもとめない石や砂に科学の視点を当てると目を見張る造形美が現れることが子ども達の心に響いたのではないか。

〈討論〉

教師の知識が先行し教えたことが多くなると子ども達の現実と遊離した授業が展開されることになる。青木氏の取り組みは

地域への愛着にこだわったものであり、五官を通して学んだものは、「受験学力」と違ったものを子ども達の内部に堆積させるものである。青木オリジナルの理科の実践は、ただ単に岩石の区別を教えるのではなく、岩石をこえた、子ども達にとつてもっと大切なものを学ばせることになったのではないか。地域に入つて足で稼ぐ教材。地球の膨大な歴史の一部として存在する自分への自覚を育んでいる実践である。

報告II 「学校の再生と地域の再生を統一してとらえる」

檜山管内せたな町立大成中学校 大口久克

〈報告の概要〉

東日本大震災を契機に地域と学校の関係を一層考えることになった。それは、過疎地檜山において、学校が生き生きするためには地域も生き生きしなければならぬということであった。地域に根ざす教育を標榜している檜山であるが、その根ざすべき地域が疲弊の一途をたどる中、地域の中の学校であり続けるためにはどうしたらよいのか。子どもの学習権と成長・発達を保障するための学校と地域のあり方について、総合学習で取り組んでいる伝統芸能の久遠神楽を中心に報告した。

〈討論〉

久遠神楽の取り組みで、地域の人たちの喜ぶ姿を見て子ども達は自己肯定感をふくらませ、また、先輩から後輩へと文化の

伝承者になっていく実感をも持ち合わせるようになっていく。困難な地域とどう向き合うか。困難な中でも愚直に生きている人間の姿に子ども達は信頼を寄せるものである。大口氏の指摘する内発的発展論は浦幌でも実践されている。そこでは村づくりを子ども達と議論して進めていることにも今後注目していきたい。

報告III

「生徒・保護者との共同の教育課程づくりを目指して」

〈服装・頭髪に関わる生徒会自主規約、授業評価の取り組みを中心〉

北海道富良野高校 松代峰明

〈報告の概要〉

97年に行った服装自由化以降、服装がだらしくなったことが改善されず日常化する状態に地域からの評判もよくないものとなっていった。様々な議論の末、11年度入学生から制服を導入し、頭髪・服装の規則を教員が作り、これらに生徒会が対案を示した場合はそのことを検討することとした。生徒会執行部は「服装自由化宣言」を守るために、「服装頭髪に関わる生徒会自主規約」を策定し、状況の「改善策」として校長に提出し事態の推移を見てもらうことになった。結果として状況は劇的に改善されることになったが、一方「自主規約」は基準は曖

味という声も上がりPSTの懇談会でも検討が開始されることになった。

また、授業評価については、結果を担当教員の自己責任にせず、授業改善への集団的・組織的な取り組みに資するものとし、教員と生徒との相互評価の関係も大切にしながら、学びの質を問い直せるようなものとした。

#### 〈討論〉

地域の声を無視せずに子どもに考えさせることはとても大切なことである。すつきりとすぐにいくこと。問いと答えとの関係が近いものでは子ども達は高まらないのではないか。ごちゃごちゃ、ゆっくり、いつたりきたり。まどろこしいようでも、時間のかかるこの作業こそ大切にしたいものである。リアリティーを欠いた単なるディベートでは子ども達が高まらない所以がそこにある。民主主義は意見を重ね合わせていくこと。それは、相手と自分が違う考えの持ち主であるという、相互の存在の尊重の上にたつて、その「違い」を埋め合う努力をすること。心を砕く質と量で決定していくものである。

#### 報告IV

##### 「アンケートから見る西いぶり高校生気質」

##### ゆきとどいた教育をすすめる西いぶり連絡会

##### 〈報告の概要〉

学校多様化、学校選択肢の拡大という経済原理を取り入れた

道教委の教育「改革」は、西いぶりでも以下のように具体となって現れることになった。①登別高校・登別南高校の統合③登別高校定時制・豊浦高校・室蘭工業定時制募集停止④室蘭東翔高校（総合学科）設立⑤室蘭清水丘英語科廃止・単位制化⑥中等教育校設立⑦学区拡大等である。そのことは結果として、「近くの行きたい高校がなくなつた」「通学による経済負担が大きすぎる」「総合学科や単位制高校になつて生徒も教師もゆとりがなくなつた」との声が上がるようになった。当会ではアンケート活動を通しての子ども・保護者・教職員の声を束ね、子ども達が生き生きと通うことのできる学校のあり方を「提言」するための作業を進めている。

#### 〈討論〉

入学者が少ないことのおりを受けて統廃合が全道各地で進められている。そのことで長距離の通学を余儀なくされ、部活動や学習の時間が奪われることになっている。「教育の機会均等」が有形無実化しているのではないか。室蘭市に住みながら室蘭の高校に通えず地方の高校へと通う生徒の気持ちはどのようなものであるか。また、地方の小規模校が展開していいいな教育実践でどれだけの子ども達が学習権を保障されてきたか。そのことの吟味が「教育の機会均等」の理解をより深いものとする。